増補

鷗外文学の位相

長谷川

鷗外文学の位相

長谷川 泉

国文学研究叢書

明治書院

著者略歴

大正７年，千葉県に生まれる。

昭和17年，東京大学国文学科卒業。

専攻近代日本文学。

学習院大学講師，医学書院社長。

著　書

「近代日本文学評論史」

「近代日本文学思潮史」

「森鷗外論考」正続等鷗外研究７部作

「彩絵硝子の美学」

「川端康成論考」等

国文学研究叢書

■

増補　鷗外文学の位相

定価　2,200円

昭和49年５月５日　初版発行
昭和54年３月25日　増補版発行

著　者　長谷川泉（はせがわいずみ）

発行者　株式会社明治書院
　　代表者　三樹彰

印刷者　株式会社啓文堂
　　代表者　小林啓三

■

発行所　株式会社 明治書院
東京都千代田区神田錦町1—16
郵便番号　101
電話　東京（03）292-3741（代）
振替口座　東京　3-4991番
©1974　長谷川泉　3391—24920—8305

はしがき

本書は森鷗外に関するわたくしの六冊目の著書である。すなわち「森鷗外論考」（正・続）「鷗外『キタ・セクスアリス』考」（正・続）および写真作家伝としての「森鷗外」の五部作に次ぐ。

*

本書は四部構成から成る。

第一部は森鷗外の文学的人間像の全貌に関しての概観である。巨視的な鷗外像は、ここに浮かびあがる。総括的な概説であるから、細部についての追求は、ここでの作業ではない。しかし、つとめて最近の研究は採り入れるように努めた。

第二部は、鷗外論の各論である。

この部においては、鷗外の思考の構造が日本近代の知的運命とかかわる点を主として追った。日本の近代が西欧近代とかかわる命運は、よけて通ることのできない問題であり、

明治の知性鷗外は最も鋭敏にこの問題と取り組むことになった。「妄想」の精神構造は端的な鷗外の反応である。

鷗外は文芸思潮としての自然主義に、いち早い対決の姿勢を示した。中江兆民訳の「維氏美学」を除いては、未だ啓蒙的な自然主義に関する紹介すら話題にのぼらない段階においての反応の厳しさであった。晩年における鷗外は、自然主義に対して必ずしも青年時代の鷗外と同一ではない。自然主義に対する鷗外の対応の視座は一面的に決定することはできないが、重要な課題であることは否めない。

なおこの部には鷗外論の各論ではあっても、特殊な問題を取り扱っている。作品についてのジャンルにも目を注ぎ、かつ比較文学の視点も、ここで加えることにした。

第三部は「舞姫」に関する論考を集めた。「舞姫」についてのわたくしの関心は深く「森鷗外論考」(正・続)「鷗外『ヰタ・セクスアリス』考」(続)においても「舞姫」論を収載してある。本書に収めた「舞姫」論は、その余論のようなものである。わたくしは、いつの日か、「舞姫」論考の本格的な作業に取り組みたいと思っている。それはそれとして、ここには関心のありようの一端を示した。

第四部は主として歴史小説についての論考と、鷗外の生涯を貫く重要な哲学「かのやうに」への道程とその発展の論考を収めた。「森鷗外論考」の作品論と併置することによっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

て意味を持つとも思う。

わたくしの今後の関心は、主として作品論に傾斜して行くことになると思う。そのためには、これもまた一つの道程であると思う。

*

本書は以上のような構成から成るが、各論文の密度は必ずしも統一された同質のものではない。なかにはやや啓蒙的記述のものもある。

目下、岩波版第三次「鷗外全集」が刊行中であり、逸文が多く収められた点では、読者の利便は大きくなった。全集に望む点は欲をいえばきりがないが、鷗外親炙の利便が加わったことは喜ばしい。

最近は海外の日本文学研究家の間にも鷗外への傾倒の度合いが高まって来ている。鷗外を措いて、日本の近代文学を論じることはできないからである。

見上げれば、鷗外文学への登攀の途は、彼方に連なる。しかし、その途は、もはや引き返すことのできない途である感慨が切である。(昭和四十八年歳末)

増刷に際し「V」部を増補した。その他、全般にわたって補訂を加え、最近の知見を盛ることにつとめた。(昭和五十四年二月)

長谷川泉

目次

Ⅰ

明治の知性森鷗外……9

Ⅱ

鷗外の近代と反近代……47

鷗外と自然主義……57

藤村と鷗外……70

鷗外の詩……82

比較文学からみた鷗外……119

Ⅲ

「舞姫」の材源……141
「舞姫」等三部作論争とその基盤……170
「舞姫」論をめぐって……189
「舞姫」理解と鑑賞の問題点……202

Ⅳ

「興津弥五右衛門の遺書」の改作……211
「山椒大夫」への構成……227
「最後の一句」の資料と背景……248
「かのやうに」への道程……261

Ⅴ

「『舞姫』エリス試考」への試考……311
「在徳記」漢文説の問題……316

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

明治の知性森鷗外

大正十一年（一九二二）鷗外森林太郎は、死の床にあって遺言を口述した。筆録したのは、東大以来、つねに身辺にあった親友賀古鶴所であった。「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」「墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス」とされた。

鷗外の墓は二か所にある。東京都下三鷹市の禅林寺と、故郷である島根県鹿足郡津和野町の永明寺にあるものがそれである。いずれも、鷗外の遺言どおりに、中村不折の文字になる「森林太郎墓」と彫られているだけであって、そのほかの文字はいっさい加えられていない。鷗外の遺言は、その点では厳重に守られたのである。

鷗外は文久二年（一八六二）一月十九日石見の国鹿足郡津和野町田村横堀（島根県鹿足郡津和野町大字町田イ二三一）に生まれた。明治五年（一八七二）十一歳のとき、父静男に伴われて東京に出てから、存命中は故郷津和野に帰らなかった。死んではじめて故郷に永遠のいこいを求めたのである。

津和野は、四万三千石の亀井侯の居城三本松城の城下町である。鷗外の存命当時は、まだ鉄道も通

じていなかった不便の地であったことも、多忙な鷗外の故郷入りをさまたげたかもしれない。

鷗外は「混沌」のなかで、故郷の津和野人に向かって、つぎのように忠告している。

私は津和野人が努めて小才を苅り除いて、正直を保存して、真のえらい人間になるやうにと願ふ。

津和野藩は小藩であったが、文・武にすぐれ、とくに教育方針がよろしきを得て、英才が輩出した。藩校養老館が充実し、儒学者としては山崎闇斎の高弟である山口剛斎が招かれて、その子孫が教育の任にあたった。国学者には平田学派の大国隆正・福羽美静・岡熊臣がいた。蘭医学者には吉木蘭斎・進藤良策・室良悦がいた。数学者に桑本才次郎がいた。洋学を志して大をなした小藤文次郎・山辺丈夫・八杉利雄らが出た。そして、明治の百科全書的な啓蒙学者西周も出た。

森家は代々、津和野藩の典医の家柄であった。当時の医家、とくに典医は第一級の知識人である。鷗外の父静男も長崎でオランダ医学を学び、また佐倉の順天堂で近代医学を学んだ。鷗外は森家の長男として生まれたから、生誕と同時に典医の家を継ぎ、森家を興すべきことを宿命づけられた。森家の世継ぎのなかで、医業をきらって逐電した者がおり、禄高を減らされるようなことがあったし、また鷗外の父も祖父も、森家に生まれた嫡男ではなく、他家からの入り婿であったから、久しぶりに生まれた森家の長男は、たいそう喜ばれ一家を興すべく期待された。

林太郎が生まれると、神棚に灯明が輝き、家人は涙を流したという。鷗外の母峰子も、祖母清子も、男まさりの賢女であったから、家庭教育は予習・復習を含めて厳格であった。そのような期待にこた

えて、鷗外は本の虫といわれるくらいに、よく勉強した。使いに出された途中でも、本を手から離したことがなかった。そして、養老館ではまれにみる秀才として注目された。

鷗外は、のちにアンデルセンの翻訳「即興詩人」を出版したとき、その序文に、つぎのようにしるした。

> 此書は印するに四号活字を以てせり。予の母の、年老い目力衰へて、毎に予の著作を読むことを嗜めるは、此書に字形の大なるを選みし所以の一なり。

すなわち、年老いた母峰子が、目が悪くなっても、息子の著作を読むので、母の目をいたわりかばって、大きな四号活字で組んだというのである。この母にして、この子あり、母も偉いが、鷗外の親孝行の心情がよくあらわれている。鷗外日記を見ると、母とともに校正した記述がよく出てくる。森家とは、そういう家庭であった。一家をあげてのそのような気持が、鷗外にすぐれた多くの仕事をさせることになった。

西周は鷗外の先輩であるとともに、森家の親戚でもある。西周の父が、森家の出で、西家にはいったからである。西周は、鷗外のすぐれた秀才ぶりにほれこんで、東京へ出て勉強することを何度もすすめた。父静男は最初は慎重であったが、明治四年に廃藩置県があり、藩校養老館も閉鎖されたので、ついに意を決して東京へ出ることになった。十一歳の鷗外が父に伴われて、津和野をあとにしたことはすでに述べた。明治六年には、残っていた森家の全家族も、津和野を引きはらって上京した。

明治維新による政治・社会・文化の変革は急速であった。英君であった藩主亀井茲監(これみ)はそのような時代の動きを見通す点でもすぐれていた。森家は、まず亀井旧藩主を頼って東京での生活を始めた。やがて静男は郡医をへて開業するが、賢夫人峰子の才覚によって相当に繁盛する。東大卒業後の鷗外が、一時父の開業の手伝いをしたことは「カズイスチカ」のなかに書きこまれている。鷗外が、後日、亀井家のためにつくしている趣は、旧恩を忘れない心根に出たものである。

鷗外は上京後、一時西周の家に寄宿してドイツ語を学ぶために進文学社に通学した。そのころの体験は、「キタ・セクスアリス」や「灰燼」のなかに書かれている。西周の家庭のことや、西周から与えられた注意についての、鷗外なりの考え方が述べられている。鷗外は、一種の恩人ともいうべき西周の伝記を「西周伝」として記述している。これは、いっさい私情をまじえない客観的な叙述である。

鷗外は明治七年第一大学区医学校（のち、東京医学校と改称、今の東大医学部の前身）に入学した。同級生には、さきに述べた親友賀古鶴所や、のちに東大病理学の教授となった三浦守治(卒業成績は一番)や、のちに軍医仲間となった小池正直(まさなお)・菊池常三郎・谷口謙・江口襄(じょう)などがいた。鷗外は入学の際に、正規の年齢が不足していたので、実際の生まれは文久二年であるのに、万延元年（一八六〇）生まれと戸籍をごまかして入学した。したがって、二歳だけ実際の年齢よりは年長をよそおったわけである。

東大を卒業した明治十四年の鷗外の表向きの年齢は、二十二歳であるが、実際の年齢は満二十歳にも達していなかった。同期生で、鷗外のつぎに若い医学士は、二十八人中、どんじりで卒業した満二

十三歳の島田完吾であったから、鷗外がいかに若い医学士であったかがわかる。しかし、鷗外の学力は、ほかのひげづらの同期生に劣るものではなく、卒業成績は八番であった。八番というのは、鷗外の実力からすれば、たいそう悪い席次であって、ほんとうの実力は四番くらいであったという。卒業成績が悪かったのは、シュルツェという外科担当の外人教師ににらまれて、その点が悪かったためである。そのほか、卒業の年に胸に水のたまる胸膜炎になったり、下宿していた上条（かみじょう）という下宿屋が焼けて、ノート類を焼いてしまったりしたようなことがあった。そんなことも、影響していただろう。

鷗外は同期生にくらべて、あまりにも若かったから、寄宿舎などでいっしょに生活してゆくうえでは苦労があった。「キタ・セクスアリス」のなかには、その一面が書きこまれている。稚子趣味の対象になって、あやうく蒲団むしにされそうになったり、いろいろの体験をした。だが、こと学問にかけては、少しもひけをとらなかった。このようにして、東大医学部で、最も若い医学士が誕生した。当時は、戸籍があまり厳重でなかったから、二歳の年齢をごまかすようなことができたのである。鷗外は、開業免状を下付してもらう書類や、陸軍入りをする書類など、公のばあいには、万延元年生まれということでおし通した。

鷗外は開業届を出して、父静男の手伝いを一時したが、一介の開業医となることは、森家を興すべき長男の本来とるべき道では、もちろんなかった。鷗外の本心は、文部省の留学生として西欧に学ぶことであった。鷗外はその運動をしたが、卒業成績八番のゆえに不可能なことが明らかになった。

鷗外の陸軍入りは、その後急速に進められた。同期生の小池正直は、時の軍医本部次長石黒忠悳(ただのり)に漢文の推薦状を提出して鷗外の俊秀ぶりをたたえ、この秀才を陸軍は採るべきだと力説した。小池の漢学の造詣は深く、鷗外も一目おいていたが、鷗外も早くから漢学を学び、浄瑠璃本の「朝顔日記」や「源氏物語」の歌を漢訳したりした。のちに小池を凌駕するようになったのは、鷗外の努力の賜である。鷗外のドイツ留学時の日記は、すべて漢文で書かれた。「航西日記」「在徳記」(雅文体に書き直されたものが現在残されている「独逸日記」である)「隊務日記」「還東日乗」が、そうである。また、その後の鷗外日記は簡朴な漢文脈のもので、晩年にいたるにしたがって、その傾向はいちじるしい。ドイツ留学時代に、鷗外が読破した本の余白にしるされている感想は、ほとんどが漢文である。

鷗外の陸軍入りは、両親の希望でもあった。陸軍入りをした同期生は、在学中から陸軍の給費生であり、鷗外はそうではなかったが、森家にとっては、鷗外が開業などして父親の手伝いをしてくれても、ありがたいことではなかった。

両親を動かしたものには、背景がある。さきにふれた西周は、陸軍参謀本部御用掛であった。その西周が養嗣子とした紳六郎の兄林紀(つな)は陸軍軍医本部長であった。林紀の前任者は松本良順(のち順)であり、林紀とは親戚関係にあり、かつ鷗外の父静男とは師弟関係にあった。このように稀有の秀才鷗外の周囲は、みな当時の陸軍の中枢につながっていたのである。鷗外は、けっきょく、陸軍にはいり、やがて同期生の一選抜として、ドイツ留学の宿願をはたした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.